ニュー・クリア・イブ

伊月　桂

本から顔を上げて、フィルター越しに細く深く息を吸った。

長いこと机に向かっていたせいで、背中が凝っている。軽く背伸びをした。ふと窓際を見遣ると、彼女はみかんを積み上げた本の上に乗せては別の本の山に移してを繰り返して遊んでいた。

「ひつじ、何してるの」

煙草を加えたまま尋ねると、ひつじはにっこり笑った。
「どの本を爆発させようか考えていたの」
「爆発？」
「この前読んだ本に書いてあったの。本の上に果物を置いたら爆発するかもって話」
「ああ、なるほどね」
それは画集じゃないと、とか、檸檬じゃなくちゃ、なんて訂正してやる気は毛頭無い。ただ、大きな目をこちらに向けて笑う顔に、煙を吐きかけて、「馬鹿ね」と言ってやった。彼女はキョトンとしたあと、へらっと情けな

く笑ってみせた。そして、もうアーカイブにも残っていない古い映画の歌を口ずさみながら、みかんを本の上に乗せる遊びを再開した。その背中を煙越しに眺めながら、今日の夕飯をどうしようかと考えていた。

窓の外は雨と灰で白く煙っていて、今はもう誰も乗らない観覧車が、川の向こう岸でイルミネーションを煌々と灯しながら鈍く回転をしているのがぼんやりと見えた。

第三次世界大戦は七年前にようやく終わった。何千発

もの核爆弾や核ミサイル、放射性物質を含んだ雨や灰によってほとんどの生き物が死んだために、どこの国も戦力を確保できなくなり、戦争を止めざるを得なかったのだ。生き残った人間に対して、各国政府機関はそれぞれが独自に定めた検査をし、精神、身体が共に健全な人間と認められた者を他の惑星へと移住させた。移住の適性がないとみなされた人間と地球を離れることを嫌がった人間が、有毒な雨と灰が延々と降り続ける地球に残された。

私は他者との関係の構築がうまくできないために、ひ

つじは知能が最低基準を満たしていないために検査で弾かれた。他の惑星へ移住していく人間たちを乗せたロケットに、追い縋るひつじの姿は獰猛な獣のようで目が離せなかった。ターミナルで泣き喚く彼女を今でも鮮明に覚えている。ひたすら泣く彼女に近づいて「うちの子になる？」と聞くと、ひつじは頬を手のひらでゴシゴシと拭いながら、頷いた。

廃墟のうち比較的綺麗な家を一軒手に入れてはじまった生活は、世界大戦の前ほど文明的ではなかったが、今のところそれほど不自由はしていない。残された普通の

人間たちが不自由しているといえば食事だろうか。汚染された土壌ではろくな作物も育たず、肉や魚を獲っても食べられるかわからない。

音割れしたチャイムが聞こえた。

短くなった煙草を灰皿に押し付けてから、ドアを開けると、防護服で身を包んだ中年男性が立っている。玄関に入れると、男性は懐から薬品が入った瓶をいくつか取

り出した。瓶を検品してから頷いてみせる。瓶の数と同じ数の肉の包みを渡すと、男性はほっとした表情でそれを受け取り帰っていった。

リビングに戻るとひつじはまだみかんで遊んでいた。時折本をパラパラとめくっては閉じて積み上げて、その上にみかんを移し替えている。

「ひつじ、今日は何食べたい？」

薬の瓶を机に並べながら聞くと、しばらく思案する唸り声のあと「わからない」と返ってきた。

「……じゃあ、雨と灰がやんだら、どんなところに行き

たい？」

両手でみかんを弄びながら、ひつじは口を開いた。

「……ランゲルハンス島」

馬鹿ね、と言おうとして口を開いた。しかし、思いとどまって「了解」と笑うと、二本目の煙草に火をつけた。

ひつじに近寄って、片手で後頭部を押さえ、薄紅色の両唇の間にもう片方の手の指を二本滑り込ませる。彼女は目を見開いたが、すぐに顔を歪めると、指を思い切り噛んだ。喉の奥をつつくと苦しそうに顎の力を緩めるので、その隙に頬の内側を引っ掻いて指を抜いた。口端か

ら唾液が形の良い顎に伝うのを笑いながら見ていると、涙目で睨みつけてくる。視線を全身で受け止めながら、後頭部を押さえていた手で煙草を口から離す。赤い口紅がフィルターにべったりとついている煙草を灰皿に押し付けて、シャーレの中に男の持ってきた瓶の中身をぶちまけた。

ひつじの見た目は完璧だ。

ふわふわの猫っ毛。くりくりとした大きな目。長い睫毛。すっと通った鼻筋。薄紅色のぽってりとした唇。すべすべとした白く瑞々しい肌。すらりとした、しかし細すぎない手脚。桜貝の爪。成熟しきっていないなだらかな身体の線。

この身体に検査をクリアできる程度までの知性が備われば、全てにおいて理想的だ。娯楽を失った地球上の人間を慰めるには相応しい、ある意味現代的で純粋な女性。それが複製されればどんなにか良いだろう。

爪の間にあるひつじの口腔内細胞をシャーレに入った培

養液に落としながら思う。

かつて動物の複製は乳腺細胞を培養し、核を取り除いた卵細胞にその乳腺細胞を挿入し、電気刺激を与えたものを子宮で育てることで作られていたと、本で読んだ。動物で可能ならば人間だって、と考えて試してみること一九九六七四回。今のところ全部失敗している。ある個体は顔が無かった。ある個体は骨が無かった。またある個体は目が無かった。足りない個体は記録をつけてから全て処分した。

ひつじに入ることを禁じている地下室へ培養液に満た

されたシャーレを持って入ると、一九九六七四回目の失敗作が顔を上げた。

ふわふわの猫っ毛。くりくりとした大きな目。長い睫毛。すっと通った鼻筋。薄紅色のぽってりとした唇。すべすべとした白く瑞々しい肌。すらりとした、しかし細すぎない手脚。桜貝の爪。成熟しきっていないなだらかな身体の線。完璧だった。

心臓がないことを除いては。

部屋に備えつけてある冷蔵庫の中には一九九六七三回目の頬の肉と腿の肉が残っている。他のまともな部位は

周辺に住む人間にわけてしまったし、内臓と端肉はまとめてさっきの男に渡してしまった。ランゲルハンス島を希望するひつじのためには、一九九六七四回目を解体するしかない。猿轡を噛ませて、手脚を縛った。

「膵臓だけでもとっておけば良かったなぁ」

そう呟いて一九九六七四回目の柔らかな腹部にメスを入れた。くぐもった唸り声が聞こえる。心臓がないにもかかわらず溢れ出す血を奇妙だとだけ思った。

「ご飯にしましょう」

そう言って料理の乗った皿をテーブルに置いた。ひつじは弄びすぎて変形したみかんを放り出してテーブルに駆け寄ってくる。椅子を引いて座らせてやると、さっきまでじっとりと睨みつけてきたのが嘘だったみたいに、からっとした笑顔を向けてきた。料理を口に含むと、幸せそうに笑う。「おいしい？」と尋ねると、何度も強く首を縦に振った。

「それがランゲルハンス島の味だよ」

喉の奥で笑いながら言うと、ひつじは「ふぅん」と声を漏らした。

「ねぇ、きっといつか連れて行ってね」

料理を食べ終えてそう言った彼女に、「いつかね」と返した。

本を読みながら窓辺で遊ぶひつじを見ていると、おもむろにひつじが窓を開けた。雨と灰が部屋に入ってくる。慌てて窓を閉めさせようと立ち上がると、ひつじは笑いながら檸檬を外に放り投げた。とぷん、と音がして、家の前の川を檸檬が流れて行く。

「何しているの？」
そう尋ねると、彼女は笑って「月みたいでしょ？」と流れて行く檸檬を指差した。
「そうね」
そう呟いて窓を閉めた。
「ほら、拭かないと病気になるわよ」
白いタオルで身体を拭ってやると、ひつじはくすぐったそうに身を捩った。
「ねえ」
脚を拭っていると、頭上から声をかけられた。

「私のこと、好き？」
「馬鹿ね」
鼻で笑う。
「私はひつじのことを大切だと思っているわ」
それを聞くとひつじは「そう」と呟いて、そして微笑んだ。
しばらくしてひつじが眠ってしまうと、地下室に移動して、さっき作ったものとは別のシャーレを取り出した。数日前から培養していたひつじの細胞だ。そのうちのひとつを取り出して自分の卵細胞に入れ、電気刺激を与え

た。それを人工の子宮に移して、男が持ってきた薬品のうち成長促進剤と栄養剤数種類を注入する。これで、数日後には一九九六七五回目のひつじの複製ができあがる。

翌日、目がさめるとひつじはどこにもいなかった。リビングにもトイレにもお風呂にも、地下室にも、家の中のどこにもいない。もしかしたら出かけたのかもしれないと思い、一日待ってみたが、帰ってくる気配もない。

仕方なく防護服を着て外出することにした。雨と灰で煙る景色の中で、昼夜問わず灯された観覧車のイルミネーションがひどくゆっくりと動くのがぼんやりと見えた。

数日かけて彼女の足で行けそうな場所を当たってみたが、近所の家にも、観覧車のある遊園地の廃墟にも、ひつじはいなかった。ほとんど外出させなかった彼女がどこにいるのか、見当もつかない。途方に暮れていると、途切れ途切れの歌が聞こえた。古い映画の歌だった。それを頼りに歩くと、ひつじがずぶ濡れでデパートのショーウィンドウ前に立っているのを見つけた。どこで手に

入れたのかわからないデニッシュパンを齧りながら歌う
ひつじに声をかけると、彼女はへらりと笑った。
駆け寄って白く柔らかい頬を叩く。
「ひつじ、あなたって本当に馬鹿ね」
なるべくヒステリックに聞こえないように言う。ひつじはキョトンとした後、顔を歪めた。大きな目が涙で揺れている。
「そこは抱きしめてくれるところでしょ」としゃくりあげながら言う彼女をもう一度叩いた。
どれだけ心配したか知らないくせに。

そう言おうとして止めた。

両目からぼろぼろと涙を零して睨みつけてくる彼女を睨み返すと、「もういい、わかった」と低く呻いた。そして、ひつじは走り去ってしまった。もう追いかける気も失せて、懐から取り出した煙草に火を点ける。わからず屋の女の背中を揺らぎながら立ち上る煙の向こうに見送った。

家に帰って身体を拭ってから地下室に行くと、一九九六七五回目の複製が完成していた。一通り検査をしてみたが、今度こそ異常は見当たらない。

良かった、完成した。

ふわふわの猫っ毛。くりくりとした大きな目。長い睫毛。すっと通った鼻筋。薄紅色のぽってりとした唇。すべすべとした白く瑞々しい肌。すらりとした、しかし細すぎない手脚。桜貝の爪。成熟しきっていないなだらかな身体の線。

今度こそ完璧だ。あとは知性を育てていけば良い。な

んなら、私の脳の複製を作ってそっくり移し替えてしまうのも良いかもしれない。

そんなことを考えていると、複製がゆったりとした動きで近づいてきた。どうしたの、と声をかける前に、複製は私の頭を抱きしめる。すべすべとした白く瑞々しい肌で包まれた、膨らみはあってもやや平坦な胸に顔を押し付けられる。

「何をしているの？」と冷静を装って尋ねると、複製は私の後頭部を撫でた。上から下へ、それを何度も繰り返す。母親が子どもにしてやるような行動だ。

「ああ、そうか」
複製は複製でも、これはひつじの複製なんだから。
「こうして欲しかったのね」
生まれたての複製の真新しく純粋な肌に私の涙が伝った。

＜了＞